

明治天皇と東郷平八郎

——日本海海戦前夜のエピソード——

嶋田 耕 一

1 日露開戦

明治三十三年（一九〇〇）、北清事変の際にロシアはその巨大な兵力を満州に向け、事変解決後もなお十万という一大兵力を残存させた。

これ以前、欧州列国は清国に対して勢力を伸ばし、清国は当然ながら排外思想が拡がりをみせていた。排外思想を信条とする武装教団の義和団は、「扶清滅洋」すなわち外国の勢力を駆逐し清国を支えることを目的として山東省で決起し、次第に勢力を増して明治三十二年（一八九九）四月には京清（北京、天津）地方にまで進出。この地において外国人を次々に殺害、キリスト教会に火を放つなど暴徒化する。清国政府のなかには、保守派と開

明派の対立があり、暴徒らを鎮圧すべき官兵が逆に暴動を煽るような事態にいたってしまった。列強は在留する自国民保護のため軍艦を十五隻から五十隻に増やし、さらには陸兵五万人を上陸させ、ようやくにして鎮圧することができた。日本は列強からの出兵の求めに応じ、北京を日本軍を主力とする連合軍が占領し北清事変は終息をみたのである。清国と関係する十一カ国とで北京議定書が結ばれたのだ。

しかし、ロシアは凍港であるウラジオストクに代わるべきものとして明治三十一年（一八九八）、不凍港である大連と旅順の租借権を獲得、そのうえ極東支配をも目論んでいた。これらにより、日本国内においてロシア打倒の気運がいよいよ高まる。

それでもロシアに対して撤兵することを日本は粘り強く交渉する。だが、明治三十六年（一九〇三）八月には旅順に極東総督府を設け、十月になると奉天を軍事占領するにいたった。そのみか、朝鮮へ向けて南進をくわだて鴨緑江河口の龍巖浦に侵略した。ロシアの進出によつて東アジアにおける利権が侵されることを危惧するイギリスと日本は、明治三十五年（一九〇二）に日英同盟を結んでいた。

満州からの撤兵を要求する日本に対して、極東総督にアレクセーエフ海軍大将を任命することで対抗する。撤退の意思を示すのではなく、むしろ積極的な支配をあからさまにするのだった。

日露の外交交渉はついに暗礁に乗りあげた。明治三十六年（一九〇三）十二月二十日、日本は閣議において不転の決意を表明、海軍の戦備が整うのを待ったのち、明治天皇が親臨された御前会議において開戦決意の御裁可を得た。その際、天皇陛下におかせられては「四方の海みなはらからと思う世になど波風のたちさわぐらむ」と平和祈念の歎慮を込めた御製を詠じあそばされたのであった。翌二月、対露交渉を打ち切り、六日には、「自ら其の侵迫を受けたる地位を鞏固にし且つ防衛するため其の最良を思惟する独立の行動を探ることの権利を保留す

る」としてロシアに国交断絶を通告した。

二月八日から九日にかかる深夜、日本の連合艦隊所属の駆逐艦は、旅順港外に停泊していたロシア太平洋艦隊を夜襲、九日午後には仁川沖での海戦が勃発、ここに日露戦争が始まった。開戦時の彼我戦力は、ロシアが五十一万トン、日本は二十三万トンであった。

二月十日、宣戦の詔勅が発せられる。このときの連合艦隊編成は次の通りである。

◇連合艦隊司令長官 東郷平八郎中将

◇第一艦隊司令長官 東郷平八郎中将

参謀長 島村速雄大佐

第一艦隊司令官 梨羽時起少将

参謀 塚本善五郎少佐

◆戦艦 三笠（司令長官座乗） 朝日 富士 八島

敷島 初瀬

第三戦隊司令官 出羽重遠少将

参謀 山路一善少佐

◆巡洋艦 千歳（旗艦） 高砂 笠置 吉野

◆通報艦 龍田

第一駆逐隊司令 浅井正次郎大佐

◆駆逐艦 白雲 朝潮 霞 暁

第二駆逐隊司令 石田一郎中佐

◆駆逐艦 雷 隴 電 曙

第三駆逐隊司令 土屋光金中佐

◆駆逐艦 薄雲 東雲 漣

第一水雷艇隊司令 関重孝少佐

◆水雷艇 第69号 第67号 第68号 第70号

号

第十四水雷艇司令 桜井吉丸少佐

◆水雷艇 千鳥 隼 真鶴 鵠

◇第二艦隊司令長官 上村彦之丞中将

参謀長 加藤友三郎大佐

第二戦隊司令官 三須宗太郎少将

参謀 松井健吉少佐

◆巡洋艦 出雲(旗艦) 磐手 吾妻 浅間 八雲

常磐

第四戦隊司令官 瓜生外吉少将

参謀 森山慶三郎少佐

◆巡洋艦 浪速(旗艦) 明石 高千穂 新高

◆通報艦 千早

第四駆逐隊司令 長井群吉中佐

◆駆逐艦 速島 春雨 村雨 朝霧

第五駆逐隊司令 真野巖次郎中佐

◆駆逐艦 陽炎 叢雲 夕霧 不知火

第九水雷艇司令 矢島純吉中佐

◆水雷艇 蒼鷹 鴿 雁 燕

第二十水雷艇司令 荒川仲吾少佐

◆水雷艇 第62号 第63号 第64号 第65号

号

◇第三艦隊司令長官 片岡七郎中将

参謀長 中村静嘉大佐

第五戦隊司令官 欠

指揮官 今井兼昌大佐

◆巡洋艦 嚴島(旗艦) 鎮遠(旧情国戦艦) 橋立

松島

第六戦隊司令官 東郷正路少将

参謀 吉田清風少佐

◆巡洋艦 和泉(旗艦) 須磨 秋津洲 千代田

第七戦隊司令官 細谷資氏少将

参謀 西禎蔵少佐

◆混合艦 扶桑(旗艦・旧二等戦艦)

◆海防艦 海門 濟遠(旧清国艦) ◆通報艦 宮古

◆砲艦 平遠（旧清国艦） 磐城 鳥海 愛宕 筑紫

摩耶 宇治

第十水雷艇司令 大滝道助少佐

◆水雷艇 第43 第42 第40 第41

第十一水雷艇司令 武部岸郎少佐

◆水雷艇 第73 第72 第74 第75

第十六水雷艇司令 若林欽少佐

◆水雷艇 白鷹 第71 第39 第66

2 日本海海戦

ロシアは日露戦争開戦当時、太平洋艦隊は戦艦七隻を保有し旅順にあったが、上村彦之丞中将の第二艦隊による蔚山沖海戦で敗れ、勢力を激減させていた。そしてまた、明治三十八年（一九〇五）一月一日に、陸軍第三軍（司令官・乃木大将）の総攻撃によって旅順が陥落したためロシア太平洋艦隊は機能を失ってしまっていた。

しかし、明治三十七年（一九〇七）四月、ロシア海軍は太平洋第二艦隊を組織し、日本へ回航させる方針をたてていた。司令長官はロジェストウェンスキー少将である。この太平洋第二艦隊こそが、バルチック艦隊と呼ばれるものだ。

ロシアの旅順艦隊を制圧した後、東郷司令長官は海軍大臣山本権兵衛大将と軍令部長伊東祐享大将に伴われてご報告に参内した。このとき、天皇陛下より「露国の増遣艦隊（バルチック艦隊）が来るというが、見込みはどうか」とのご下問があった。それに対して、平素は無口で慎重な東郷長官が「必ず撃滅いたします」と、ぼそぼそと言上したのだ。これには侍立していた山本と伊東の両名が驚いた。薩摩人である二人にとって、同郷人である東郷の奉答はとんでもない大言壮語に思えたのだ。二人はのちのちまで、この話が出るたびに「東郷はたいへんなことを申し上げたものだ」と可笑しがったという。

このエピソードを自著に紹介した司馬遼太郎氏は、「撃滅」という表現は決して大言壮語ではなく、敵を一隻残らず沈めなければ戦略的効果を失うの意であると記しているが、皇国の興廢に臨んで、誠忠と憂国の至情を思わず発露したものとみるべきであろう。

バルチック艦隊の出撃準備の整ったのは十一月十五日で、一万八千海里という地球を半周しなければならぬ遠征航海だった。ロジェストウェンスキー少将は出港三日後に、ロシア皇帝によって中将に昇任される榮譽を得た。いかにロシアがバルチック艦隊に熱い期待を抱いたかを証明するものである。

四月十四日、安南（現ベトナム）に到着、五月九日にはバンフオン湾外で後続の第三艦隊と合流し、ここで再編成され、戦備を整え五月十四日朝出航する。相当の日数を要したのは口中将が、日本艦隊との遭遇は避けようと考えたからだ。露海軍が世界に誇る大艦隊を東洋に回航させることで威嚇し、外交交渉によって屈伏をはかるうとしたと思われる。

ともあれ安南を出港した艦隊は、バシー海峡において五隻の輸送船を分離、さらに日本艦隊を牽制するために二隻の仮装巡洋艦を太平洋に進路を変更させた。しかし主力は二十二日、八重山諸島宮古島東方で沖縄列島線を横断、東シナ海に入り翌日洋上で給炭船からの石炭搭載を実施した。濃霧のなかにあるバルチック艦隊は、警戒する日本海軍の無線電波が活発化してきたのを察知し航海灯の光力を減じ、マスト灯は戦列外から見えにくくするため遮光させる手段をとった。濃霧のなかで巧みに日本艦隊との戦闘をすり抜け、ウラジオストクへ一路……と考えていたとも推察される。

一方、朝鮮の鎮海湾に進出していた日本艦隊は、決戦を目前にして猛訓練に明け暮れていた。だが、五月二十四日になっても敵艦隊の動静はいぜんとして判明しなかつた。宗谷海峡か津軽海峡、または対馬海峡のいずれ

を通過するのかが問題であった。対馬沖を選択すると推測していた連合艦隊は、津軽海峡への可能性をも考慮し、津軽方面へ艦隊を向ける命令書を各戦隊に配布した。まさにそのとき、警戒中の仮装巡洋艦『信濃丸』は、ついにロシア艦隊の灯火を発見した。ただちに、無電が本隊に向け発せられる。

「敵艦隊二〇三地点に見ゆ」

敵艦隊発見が二〇三地点というのも、先の旅順二〇三高地の攻略を彷彿させ、日本の勝利を暗示しているようにも思われた。

東郷平八郎司令長官は、五月二十七日午前五時十五分、大本営に対して、

「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊はただちに出勤、これを撃滅せんと欲す。本日天気晴朗なれども波高し」と打電、さらに将兵には「皇国の興廢この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」との乙旗を掲げて全軍の士気を鼓舞した。

以下の戦闘およびいわゆる丁字戦法などに関しては、関係図書に詳細が示されているため、ここでは重複せず割愛しておく。

勝敗はおよそはじめの三十分で決した。東郷司令長官は、午後七時三十分、昼戦の終結を宣言。

夜間に入り、さらに攻撃を加え二十八日早朝には、連合艦隊主力は鬱陵島南東海面に進出していた。午前五時二十分、六十海里南方にいた第五戦隊より残敵発見の報告を得ると、ただちにネボガトフ少将率いるところの『ニコライ一世』以下五隻を包囲し攻撃する。かくして麾下将兵の生死を考えたネボガトフ少将の全責任において降伏にいたった。

バルチック艦隊は戦艦六隻、巡洋艦四隻をはじめとして十九隻が撃沈、五隻を捕獲され、死者四千五百二十四名、捕虜六千六百六十八名に及んだ。一方、日本側が失ったのは水雷艇三隻、戦死者百十六名だった。

明治三十八年十月二十三日、横浜沖における戦勝観艦式にあたり、天皇陛下におかせられては天覧あらせられ、日本海海戦に勇戦せる皇軍将兵を偲ばせ給う。さらに東郷平八郎の赤誠を嘉賞され親しく優渥なる御言葉を賜る。これに対し、元帥はただ皇天の垂恵に恐懼感激するのみであった。

日本海海戦は明治天皇と東郷元帥の二柱の君臣が織りなしたまさに一世一代の檣舞台であったと言ってよいだろう。

(東郷神社宮司)